

蠅を憎む記

泉鏡花

青空文庫

上

いたづら^し為たるものは金坊^{きんぼう}である。初めは稗^{ひえ}蒔^{まき}の稗^{ひえ}の、月代^{さかやき}のやうに素直^{こまか}に細く伸^のびた葉尖^{はさき}を、フツ／＼と吹^ふいたり、藤^{ろう}たけた顔を斜^{かた}めに^{して}、金魚鉢^{きんぎよばち}の金魚^{きんぎよ}の目を、左^{ひだり}から、又右^{みぎ}の方^{かた}から視^みめたり。

やがて出窓^{ですだれ}の管^な簾^なを半^{なか}ば捲^まいた下^{した}で、腹^{はら}ンばひに成^なつたが、午飯^{おひる}の済^あんだ後^{あと}で眠^{ねむ}気がさして、くるりと一^{ひと}ツ廻^{まわ}つて、姉^{あね}の針箱^{はりばこ}の方^{かた}を頭^{つむり}にすると、足^{あし}を投^なげて仰^{あおむ}向^むになつた。

目は、ぱつちりと睜^{みひら}いて居^ゐながら、敢^{あえ}て見^みるとも^もなく針箱^{はりばこ}の中^{なか}に可^{かわ}愛^{あい}らしい悪^{いた}戯^{ずら}な手^てを入^いれたが、何^{なに}を捜^{たず}すでもなく、指^{ゆび}に当^あつたのは、ふつくりした糸^{いと}卷^{まき}であつた。
之^{これ}を指^{ゆび}の尖^{さき}で撮^{つま}んで、引^ひくり返^{かへ}して、引^ひ出^だの中^{なか}で立^たてて見^みた。

然^そうすると、弟^{あに}が柔^なかな足^{あし}で、くる／＼遊^{あそ}び廻^{まわ}る座敷^{ざしき}であるから、万^ま一^{いつ}の過^{あや}失^{まち}あらせまい為^{ため}、注^{ちゆ}意^い深^こい、優^{やさ}しい姉^{あね}の、今^{いま}しがた店^{みせ}の商^あ売^うに一寸^{ちよ}部^ぶ屋^やを離^ちれるにも、心^こして深^こく引^ひ出^だに入^いれて置^おいた、剪^は刀^{さみ}が一^{いっ}所^{しょ}になつて入^いつて居^ゐたので、糸^{いと}卷^{まき}の動^うくに連^つれて、

それに結へた小さな鈴が、ちりんと幽かすかに云ふから、幼い耳いとけなに何か囁ささやかれたかと、弟は丸まるまる々ツこい頬ほおに微笑ほほえんで、頷うなずいて鳴ならした。

鳴るのが聞えるのを嬉うれしがつて、果はては烈はげしく独樂こまのやう、糸巻はコトコトとはずんで、指をはなれて引出の一方へ倒れると、鈴は又一つチリンと鳴つた。小な胸ちいさには、大切なものを落したやうに、大袈裟おおげさにハツとしたが、ふと心こころづ着くと、絹糸の端が有るか無きかに指はさまに挟つて残つて居たので、うかゞひ、うかゞひ、密そつと引くと、糸巻は、ひらりと面おもてを返して、糸はするくくと手繰たぐられる。手繰りながら、斜ななめに、寝転んだ上へ引きく、頭こつべをめぐらして、此方こなたへ寝返ねがえりを打つと、糸は左の手首から胸へかゝつて、宙なかに中なかだるみ為して、目前めさきへ来たが、最もう眠いから何の色とも知らず。

自ら其みづかを結んだとも覚えぬに、宛然さながら糸を環わにしたやうな、萌黄もえぎの円まるいのが、ちらくひと一ツ見え出したが、見るく紅くれなが交つて、廻むらると紫むらさきになつて、颯さつと碎みけ、三ツに成つたと見る内、八ツになり、六ツになり、散ちり々にちらめいて、忽たちまち算無さんなく、其その紅くれなとなく、紫となく、緑となく、あらゆる色が入いり乱みだれて、上になり、下になり、右へ飛ぶかと思ふと左へ躍おどつて、前後ひるがえに翻ひるがえり、また翻またつて、瞬またたきをする間まも止やまぬ。

此この軽いものを戦そよがすほどの風もない、夏ひざかりの日盛ひざかりの物静けさ、其の癬かた、こんな時は譬たと

ひ耳を押つけて聞いても、金魚の鰭ひれの、水を掻く音さへせぬのである。

さればこそ烈しく聞えたれ、此の児が何時も身震みふるいをする蠅はえの羽音はおと。

唯同時に、劣等な虫は、ぽつりと点になつて目を衝と遮つたので、思はず足を縮めると、直ただちに掻き消すが如く、部屋の片隅かたすみに失うせたが、息つく隙ひまもなう、流れて来て、美しい眉まゆの上。

留とまると、折おり屈かがみのある毛だらけの、彼の恐るべき脚あしは、ひとひと蠢うごめ始めて、睫毛まつげを数へるが如くにするので、予かねて優しい姉の手に育てられて、然そう為した事のない眉根まゆねを寄せた。

堪がたへ難あたい不快にも、余り眠かつたから手で払ふことも為せず、顔を横にすると、蠅すべは這つて、頬あたりの辺を下から上へ攀よぢむと為する。

這はふ時の脚あしには、一種の粘糊ねばりが有るから、気けだるいのを推おして払はくは可いいが、悪てく掌のひらにでも潰つぶれたら何どうせう。

下

其時^{そのとき}まで未だ些^ちとは張^{はり}の有^あつた目を、半^{なか}ば閉ぢて、がつくりと仰向^{あおむ}くと、之^{これ}がため蠅^はは頬^ほぺたを嘗^なめて居^くた嘴^{くちばし}から糸^{いと}を引いて、ぶうくと鳴いて飛^{とび}上^あつたが、声^{こゑ}も遠^{とほ}くには退^のかず。

瞬^{また}く間^まに翼^はを組^くんで、黒点^{くろてん}先刻^{さつき}よりも稍^{やや}大きく、二つが一つになつて、衝^つと、細眉^{ほそまゆ}に留^とまると、忽^{たち}ちほぐれて、びくくと、ずり退^のいたが、入交^{いりまじ}つたやうに覺^おえて、頬^ほの上^{うへ}で再^{また}び一ツ一ツに分^われた。

其^{その}の都度^{つど}ヒヤリとして、針^{はり}の尖^{さき}で突^つくと思^{おも}ふばかりの液体^{えきたい}を、其^{その}処^{こゝ}此^{こゝ}処^{こゝ}滴^たらすから、幽^{かすか}に覺^おえて居^いる種痘^{しゅとう}の時^{とき}を、胸^{むね}を衝^つくが如^{ごと}くに思^{おも}ひ起^おして、毒^{どく}を射^やされるかと舌^{した}が硬^{こわ}ばつたのである。

まあ、何^{なに}処^{どこ}から襲^{おそ}つて來^きたのであらうと考^{かんが}へると、……其^{その}では無^ないか。

店^{みせ}へ來^きる客^{きやく}の中に、過^い般^{ぱん}、真^ま桑^{そう}瓜^かを丸^{まる}ごと齧^かりながら入^いつた田舎^{いなか}者^{もの}と、それから歸^{かへ}りがけに洒^さ反^{はん}吐^とをついた紳士^{しんし}があつた。其^{その}の事^{こと}を謂^いふ毎^{ごと}に、姉^{あね}は面^{おもて}を蔽^{おほ}ふ習慣^{じゆんぱん}、大方^{たうほう}其^{その}の者^{もの}等^らの身^み体^{たい}から姉^{あね}の顔^{かほ}を掠^{かす}めて、暖簾^{のれん}を潜^{くぐ}つて、部^ぶ屋^やまで飛^と込^こんで來^きたのであらう、……其^{その}よ、謂^いひやうのない厭^{いや}な臭^{にお}氣^きがするから。

と思^{おも}ふ、愈^い々^い胸^{むね}さきが苦^{くる}しくなつた。其^{その}に今^{いま}がつくりと仰向^{あおむ}いてから、天窓^{あたま}も重^{おも}く、

耳もぼつとして、気が遠くなつて行く。――

焦れるけれども手はだるし、足はなへたり、身動きも出来ぬ切なき。

何を！これしきの虫と、苛つて、恰も転つて来て、下まぶちの、まつげを侵さうとするのを、現にも睨めつける気で、屹と瞳を据ゑると、いかに、普通見馴れた者とは大いに異り、一ツは鉄よりも固さうな、而して先の尖つた奇なる烏帽子を頭に頂き、一ツは灰色の大紋ついた素袍を着て、いづれも虫の顔でない。紳士と、件の田舎漢で、外道面と、鬼の面。――醜悪絶類である。

「あ、」と云つたが其の声咽喉に沈み、しやにむに起き上らうとする途端に、トンと音が、身体中に響き渡つて、胸に留つた別に他の一疋の大蠅が有つた。小児は粉米の団子の固くなつたのが、鎧甲を纏うて、上に跨つたやうに考へたのである。

畳の左右に、はら／＼と音するは、我を襲ふ三疋の外なるが、なほ、十ばかり。

其の或者は、高波のやうに飛び、或者は網を投げるやうに駆け、衝と行き、颯と走つて、恣に姉の留守の部屋を暴すので、悩み煩ふものは単小児ばかりではない。

小箆筒の上に飾つた箱の中の京人形は、蠅が一斉にばら／＼と打撞るごとに、硝子越ながら、其の鈴のやうな美しい目を塞いだ。……柱かけの花活にしをらしく咲いた姫百

合ゆりは、羽うしの生えた蛆うじが来て、こびりつく毎ごとに、懈たゆげにも、あはれ、花片はなびらををのゝかして、毛け一筋ひとすじ動かす風かぜもないのに、弱よわ々と頭かぶりを掉ふつた。弟あには早はや絶たえ入いるばかり。

時に、壁かの蔭かげの、昼ひるも薄暗うすくい、香かうの薫かおりのする尊みい御厨子みずしの中に、晃きら然りと輝きらいたのは、妙み見ようけん宮ぐうの御手おんての劍つるぎであつた。

一疋びき、ハツと飛とび退しきつたが、ぶつくといふ調子で、

「お刀けがの汚けれ、お刀けがの汚けれ。」と鳴ないた。

また氣勢けいはいがして、仏壇ほとけだんの扉ほそめ細目ほのみに仄見ほの見え給たまふ端たん嚴げん微み妙まうの御おん顔かん。

蠅あひは内ない々に、

「観音様くわんおんさま、お手おてが汚よごれます。」

「けがれ不浄ふじようのものでござい。」

「不浄ふじよのものでござい。」

と呟つぶやきながら、さすがに恐おそれて静しずまつた。が、暫しば時らくして一個ひと厭ついやな声こゑで、

「はゝゝゝはゝゝゝ、いや、恚こゝろ又またものも汚きたうなると、手てがつけられぬから恐おそるゝことなし。はゝゝゝ、何なにうぢやい。」と、ひよいと躍おどつた。

トコトンく、はらりく、くるりと廻まり、ぶんと飛とんで、座ざは唯ただ蠅あひで蔽おほはれて、果はては

おびただかならずま
夥しい哉渦く中に、幼児は息が留つた。

あたかよ
恰も可し、中形の浴衣、縺子の帯、雪の如き手に団扇を提げて、店口の暖簾を分け、月の肩、先づ差覗いて、

「おゝ、大変な蠅だ。」

と姉が、しなやかに手を振つて、顔に触られまいと、俯向きながら、煽き消すやうに、ヒラヒラと払ふと、そよ〜と起る風の筋は、仏の御加護、おのづから、魔を退くる法に合つて、蠅の同勢は漂ひ流れ、泳ぐが如くに、むら〜と散つた。

座に着いて、針箱の引出から、一糸其の色紅なるが、幼児の胸にかゝつて居るのを見て、

「いたづらツ児ねえ。」と莞爾、寝顔を優しく睨むと、母が露に艶かなるまで、朱の唇に蠅が二つ。

「酷いこと！」と柳眉逆立ち、心激して団扇に及ばず、袂の尖で、向うへ払ふと、怪しい虫の消えた後を、姉は袖口で嚙んで拭いて遣りながら、同じ針箱の引出から、二つ折、笹色の紅の板。

其れを紅差指で弟の唇に。

ちよいとあたり みまわ
一寸四辺を して 又唇に。
花の薫が馥郁ふくいくとして、金坊きんぼうは清々せいせいして、はつと我に返つた。あゝ、姉が居なけれ
ば、少くとも煩わづらつたらう。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「文芸界」

1901（明治34）年6月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※初出時の表題は「部屋の弟」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蠅を憎む記

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>